

5. 指導メソッドとしてのアプローチ

教育の世界には、学びのプロセスの判定に用いられる基準として<学習状況の評価基準>と呼ばれるものがあります。これは、『理解』→『思考』→『判断』→『表出』という外部情報を受け止めて理解し、それにもとづいて思考し、判断し、意思決定を行って発表したいものを表出するというプロセスを実態に即して評価しようとするものです。

このプロセスは、繰り返すことによって、受け止めた情報や、その解釈によってもたらされた新たな認識が、より有用なものになるようにファシリテートするための判定基準であると言えます。

このプロセスは、どの教育現場でも、どの学習者でも、どの教育者、指導者にも当てはめることができるものとして、世界共通の重要な視点です。

このプロセスを、更により高度に有用なものとして活用するために、私共では、外部情報と内部情報の関わり方として、整理しなおしました。(参照：2012年日本キャリア教育学会で発表した『認識の拡がり』) これによって、意図的に用意した外部情報と外部からの問いかけによって、ヒトの認識がコントロールできるということを、再度確認し、かつ、用意する外部情報の基準と、問いかけの基準を明確にすることができました。

すなわち、現状を確認するために、どのような情報を提供してどのような問いを発したら、その人の何を引き出し、確認できるか、が適切な仕組みに基づけば、予見することが可能であり、外部情報と問いかけによって、ある方向へと認識の再構成を促すことも可能であるということなのです。

これは、人物の状況を確認するチェックテストの構築を可能にし、また、それにもとづく、人物の状況改善へのファシリテーション基準を把握することも可能だということの意味します。

この試行錯誤の結果手に入れた認識再構成のノウハウを、『人物力検査シグマ』という当社独自のテストの形で完成しました。

